

I 実践

1 研究主題 互いを認め、励まし、助け合うことのできる児童の育成 ～体験活動や交流活動を通して～

(1) 主題設定の理由

本校は、「ふるさと山部を愛し 心豊かに たくましく生きる 山部っ子の育成 ーかしこく、なかよく、たくましくー」を学校教育目標とする全校児童24名の小規模校である。児童の半数は学区外から通っており、核家庭も増えてきた。児童は明るく素直で、高学年の児童が低学年の児童の面倒をよく見ている。しかし、少人数のため、集団生活の中で甘えが出て、自己中心的な言葉や行動をとってしまう児童もいる。また本校は、複式学級3クラスでクラス替えもないため、友人関係が崩れてしまうとなかなか修復が難しい。卒業後は、生徒数の多い中学校へ進学することを考えると、集団の中で思いやりの心をもって、誰とでもなかよく生活できる児童の育成が必要である。また、知的障害特別支援学級、自閉症・情緒障害特別支援学級在籍児童の割合も高く、それぞれの特性を理解し、一人一人ができることを認め合える心を育てていくことが課題である。

そこで、学校の全教育活動を通して、本校のめざす児童像である「明るく、思いやりのある子ー互いに認め合い、励まし合い、助け合う子ー」の育成を目指して本主題を設定した。

(2) 研究の内容

- ア 総合的な学習の時間、特別活動、道徳を中心とした全教育活動における人権教育の充実
- イ 異学年との交流活動の促進
- ウ 豊かな体験活動の展開推進
- エ 教職員自らの人権に関する認識を深めるための研修

2 実践内容

(1) 総合的な学習の時間、道徳、特別活動を中心とした全教育活動における人権教育の充実

ア 総合的な学習の時間の実践

総合的な学習の時間で、「ともに生きよう」をテーマに、障がいの種類について調べ、地域にある施設を福祉の観点から見学・体験学習を行った。児童が考える「おたすけタウン」の実現を目標とし、車椅子や点字の体験から助け合うことの大切さや、誰かが支えることで気持ちも豊かになることを学ぶことができた。福祉センター「ゆうゆう十王」での見学では、バリアフリーやユニバーサルデザインについて、積極的に質問し理解を深めることができた。十王町出身の方から説明を受け、今と昔の違いを知ると、さらに関心が高まっている様子であった。(写真1)



(写真1) 福祉センター「ゆうゆう十王」の見学・体験学習

イ 人権教育を取り入れた道徳授業の展開

中学年では「ごみステーション」を取り上げ、自分と違う友達の意見を知ることや話し合いを深めることで、見えない誰かと支え合うことで心地よく生活できていることに改めて気付くことができた。現在学級で行っている係・当番活動だけでなく、ボランティア精神をもって行動したいという意見を多くの児童がもち、教室のゴミ拾いや集会後の片付けに進んで取り組むことができた。(写真2)



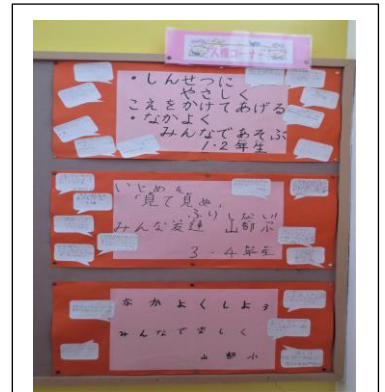
(写真2) 道徳「ごみステーション」

ウ ハートフルタイム

高学年の児童が中心となって、いじめ防止の意識を高める活動、ハートフルタイムを行った。今年度は7月と12月の2回に渡り実施し、1回目はいじめ防止標語をクラスで考え募集した。さらに、標語への思いをメッセージにして掲示することで「いじめ防止」への意識を高めた。2回目はコロナウイルス感染症予防の観点からオンラインで実施した。事前アンケートの結果から、児童同士が仲良く遊ぶために普段から気をつけていること等の具体例をクイズにしたり、いじめの定義について具体的によびかけたりと、人と関わるときのポイントや大切なことを主体的に学ぶことができた。(写真3)

エ 人権教育を考えた学級経営

互いのよさを認め合える場を各学年で設定し取り組んだ。低学年では、「今日のヒーロー」を帰りの会に実施し、一日を振り返り一人一人のがんばりや優しさ等を見つけ発表し合った。



(写真3) いじめ防止標語

(2) 異学年との交流活動(たてわり班活動)

児童を3つのたてわり班に分け、年間を通して様々な集団活動に取り組むことによって、異学年児童相互の親睦を深め、他者への思いやりや助け合う心を養うことを目指した。

ア 愛校活動・たてわり遊び

たてわり班ごとに、週1回特別教室を清掃している。上級生が下級生の面倒をみたり、やり方を教えたりしながら自分たちの学校をきれいにすることができた。今年度は学期に1回程度たてわり班で計画した内容で遊ぶこともできた。

イ 山部ふれあい運動会

本校は、すべての種目が全校種目であり、たてわり班長や上級生が中心になって取り組むことができた。下級生に対する配慮や上級生に対する感謝の気持ち等、班が一丸となって活動したり、学年を越えて互いを応援したりする姿が見られた。

(3) 豊かな体験活動の展開

今年度は、やまびこフェスティバルにて、日立市出身者も演奏者として参加する「タネもしかけもある音楽会」による鑑賞会を行った。児童は、普段使っているリコーダーや鍵盤ハーモニカの音色がプロにより七変化する様子に驚き、自分も上手になりたいという気持ちを高めることができた。共に参観していた保護者も感動している様子であった。

(4) 教職員自らの人権に関する認識を深めるための研修

ア 人権問題啓発映画「ホーム」の事例をもとに、外国人・障害者差別に対する研修を行った。話し合いの中では、社会の中でいろいろな人が当たり前であるという意識や、苦手なことを補い合える環境づくりが必要であり、学校生活の中にも取り入れ指導していきたいという意見が多く見られ、教員の中にある人権意識を高め合った。

イ コンプライアンス研修として人権教育資料を用いた人権差別の類例や「教師による暴言」について事例研修を実施した。教師の言動のもつ責任の大きさを改めて実感し、人権意識の高揚を図った。

3 成果

- (1) 道徳や総合的な学習の時間、特別活動等を通して、キャリアパスポートを活用し自分の生活を振り返り、自分や友達の個性について理解する児童が増えてきている。互いのよさに目を向け、励まし合いながら学習活動に取り組む姿も多く見られるようになった。
- (2) 異学年集団の活動や体験活動を通して、学級外の人とふれあいをもつことができた。それらによって、相手を思いやる心や郷土愛などを学ぶことができた。

II 今後の課題

様々な人権問題については身近な例やこども新聞等を取り上げ、学活や人権コーナーで児童に知らせていく必要がある。そのため、教師の人権教育に関する正しい理解と認識を高めるための研修をより充実させ、人権教育の啓発に取り組んでいけるようにする。